
三百勝

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三百勝

【Nコード】

N5394N

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

三百勝投手鈴木啓示。彼が三百勝を果たしたのには一人の名将の存在があった。その出会いにより彼はどうなったのか。近鉄の名投手鈴木啓示氏と一代の名将西本幸雄さんの出会いのお話です。

第一章

三百勝

何が自慢か。彼はその速球だった。

鈴木啓示、近鉄のエースである彼はその速球で知られていた。

しかし彼はこの頃その自慢の速球に翳りが見えてきていた。そのせいで思うように勝てなくなってきた。

「速球派が衰えたらそれで終わりだからな」

「鈴木もな。これでな」

「ああ、終わりだな」

ファンもマスコミも鈴木についてこう囁くようになっていた。それで鈴木も焦っていた。そんな時に彼を変える運命の出会いが起った。

西本幸雄。近鉄にとっては親会社が同じ関西の鉄道会社というところもありチームとしてもライバル関係にある阪急の監督を十一年務め五回も優勝させた彼が近鉄の監督になったのである。その彼が監督になるとすぐに鈴木に声をかけてきたのだ。

「御前もそろそろやな」

「何ですか？」

「技を身に着けるんや」

こう彼に言ってきたのである。

「何時までも速球だけやないやろ。足立みたいにな」

「あの人ですか」

鈴木は彼の名前を聞いて顔を顰めさせた。西本が今までいた阪急のエースである。アンダースローでありシンカーが決め球である。

何故顔を顰めさせたかというのだ。そのライバル球団のエースだからである。自然に顔に出てしまったのである。

「あの人みたいにですか」

「そうや、どうや？」

こう鈴木に対して言ってくるのである。

「どないや」

「そんなんええですわ」

だが鈴木はそれを聞いてもだった。背を向けるばかりであった。

「俺には俺のやり方があります」

「ええっていうんか？」

「ええ、好きなようにやらせて下さい」

こう言ってそのうえで自分のトレーニングを続けるだけだった。

彼は練習の虫でいつも走っていた。だからこそ実績を残していたしそのことにも自信があつた。西本の言うことを聞く気はなかった。

西本はその鈴木にだ。

何かあるとすぐに言ってきた。ランニングやピッチングをしている鈴木をすぐに叱つたのである。チームの柱である彼が叱られることでチームにはいい意味で緊張が走つた。しかし鈴木は西本に対する不満をさらに募らせた。

「俺には俺のやり方があるんや」

鈴木は強くこう言い続けた。

「そやから誰にも言われる筋合いはないんや」

西本自身に対しても言う。普通の人間ならこれでもう何も言わない。しかし西本はそれでも鈴木に言い続けた。これはチームのどの選手にもだったが。西本は誰かを臆服したり邪険にするような男ではなかった。

そして昭和五十年のオープン戦だった。鈴木はペナント前の調整で登板したが打たれてしまった。彼はあくまでペナントを見て調整しているのでありオープン戦で打たれるのは毎年のことだった。今年もそうであると思い誰もが何と思わなかった。しかしである。

西本はベンチに戻った鈴木に対してだ。声をかけてきたのだ。

「おいスズ」

「んっ!？」

「あのピッチングを見とくんや」

マウンドを指差して言うのだった。今は阪神戦である。マウンドにいるのは鈴木と同じ左腕の山本和行である。まだ四年目のピッチャーである。

そのピッチャーを指差してだ。さらに話すのだった。

「あのピッチャーの球は御前より遅い」

「それがどないしたんでつか？」

「それでもすすいすい投げとる」

彼を指差しながらさらに話すのだった。

「御前はあのピッチャーより球が速いけれどもう打たれた」

そして。

「あいつをよう見て投球術を見習うんや」

ここまで聞くとだった。もう鈴木は完全に切れてしまった。今までチームをエースとして引張ってきた自負があった。それを傷付けられたと思ったからだ。

それで鈴木は完全に切れた。そのまま踵を返しそのうえで引き揚げてしまった。その直後フロントにトレードを直訴した。

「あんなおっさんの下ではやっとなれませんわ！」

「いや、そう言わないで」

「ここはだな」

フロントも慌てて彼を引き止めにかかった。

「西本さんも西本さんの考えがあるだろうし」

「ここは」

「我慢せいつていうんですか」

「まあここはね」

「そうなるね」

とにかくここは鈴木を宥めたのだった。この場は何とか収まった。そして西本はこれで終わったかというところでもまだ彼に言い続けた。そうしているうちにだ。

第二章

鈴木は復活してきていた。そしてその年は久し振りに自分でも納得できる成績を残した。当時パリーグは前期と後期に分かれていてそれぞれの優勝チームがプレーオフで優勝を争っていたがその後期に優勝したのだ。

プレーオフは惜しくも敗れた。しかしであった。

鈴木はその後期優勝の胴上げ投手になった。その時にわかったのだ。

「この人はちやうんやな」

その西本を見て呟くのだった。

「本当に俺のことを思っ言ってくれてたんやな」

そのことがわかったのである。こうして彼は西本の本当の人間性を知ったのである。

そうしてである。鈴木は遂に二百勝を挙げた。名球界に入ることができたのだ。

だがそれで終わりではなくだ。彼はさらなる上を目指せる場所にした。

三百勝だ。二百勝よりさらに上だ。そこだと言われている。

リーグ優勝も二度経験できた。西本は近鉄をも優勝させたのだ。

そして鈴木はその三百勝が見えてきていたのだ。

「速球から技巧になつてな」

「変わったからな」

「そうだよな」

ファンもマスコミもここで彼について話すのだった。

「速球の他はカーブとフォークだけだったのにな」

「スライダーとシュートも覚えてな」

「左右の揺さぶりも身に着けたしな」

それが大きいのだった。今の彼はかつての彼ではなくなっていた。

その彼にだ。西本は言うのだった。

「スズ、御前にはまだやることがあるんや」

「やることですか」

「まずはファンの為にや」

最初は彼等の為だという。

「そしてチームの為」

「近鉄の為ですか」

「そしてこの球界の為にや」

彼にはやるべきことがあるのだというのだ。

「やることあるんや」

「それは何ですか？」

「三百勝や」

まさにそれだというのである。

「三百勝や、それを達成するんや」

「二百勝で終わりではなくですか」

「そうや、三百勝するんや」

こう彼に告げるのである。

「ええな、それをやるんや」

「俺が三百勝ですか」

「辛いかな？」

鈴木が戸惑いを見せるとだった。彼に静かに問うてきた。

「それは辛いかな？」

「わしももう歳ですし」

三十をとっくに超えている。引退してもおかしくない。辛いのは自分が最もよくわかっていた。

「やっぱりそれは」

「楽な道へは何時でも乗り換えられるんや」

しかし西本はここでこう彼に告げた。

「けれどな、それでもや」

「辛い道にですか」

「そこに行くんや」

こう鈴木に言うのである。

「それが今の御前にして欲しいことや」

「わしにですか」

「御前やつたらできる」

西本はまた彼に告げた。

「絶対にな」

「じゃあわしは」

「三百勝や」

まさにそれだというのだ。

「三百勝するんや、ええな」

「わしにできるでしょうか」

「御前やつたらできる」

その温かい目での言葉である。

「絶対にな」

「わかりました。それでは」

「今は辛くてもや」

丁度鈴木は不調だった。思うように勝てなかった。それで引退も考えていたのである。しかしここで西本はあえて彼に三百勝を言うのだった。

「御前は絶対にそれができるからな」

「やります」

その西本の言葉に頷く鈴木だった。彼の心に今西本の言葉が宿った。

それから鈴木は再び立ち直った。順調に勝ち星を重ねそして遂にであつた。

第三章

昭和五十九年五月四日。近鉄の当時の本拠地藤井寺球場においてだ。鈴木はその球場の中に入ろうとする。

その入り口にだ。スーツ姿の彼がいた。

「監督」

「おい、もうわしは監督やないで」

西本は柔和な笑みを浮かべて彼に声をかけてきた。

「そやからその呼び方はや」

「そうですか」

「スズ、それよりもや」

西本は微笑みながら彼に言ってきた。

「今日やな」

「はい、今日です」

鈴木は西本に対して真剣な顔で頷いた。

「今日決めます」

「決めるんや。その為に御前はここまでやって来たんやからな」

「この日の為に」

「御前にはやるべきことが二つあった」

西本は鈴木に対してこう告げた。

「まずチームを優勝させることや」

「それですか」

「近鉄は本当に長い間優勝できんかった」

創設以来長い間弱小球団だった。野球といえば巨人という何処かの愚劣な銅像を崇め奉っている独裁国家の様な状況は今でも続いている。近鉄は其中で巨人の栄光の陰にあった。その作られた虚像の陰にだ。

そしてその近鉄を優勝させたのが西本だった。彼が鈴木に言うのだ。

「それを優勝させる為にはまず御前の力が必要やったんや」

「わしのですか」

「そうや、そして御前が変化球を覚えてくれてチームの確かな力になつてくれた」

近鉄といえば打線である。しかしピッチャーとしての鈴木も必要だったのだ。野球は一人では絶対にできないのである。

「それでチームを優勝させてくれた」

「最初はそれですか」

「そして二つ目や」

「それが三百勝ですか」

「そや、そや」

まさにそれだというのである。

「野球を、近鉄を愛するファンの人達の為にも」
西本の言葉は続く。

「近鉄の為にも。そして」

「そして」

「野球そのものの為にもや。三百勝やるんだ」

「はい、それじゃあ今から」

「頑張るんやで」

この上なく温かい声で告げてだった。球場に入る彼を見送る。そしてその試合はだ。

鈴木は打線の援護もあり順調に試合を進めた。気付けばもう九回である。試合は五対三でありあと少しであった。

しかしである。既に百球を遥かに超えている。スタミナが不安視された。

「大丈夫か？これで」

「九回位は他のピッチャーに任せても」

「そうだよな」

試合を見守るファンからはそんな声が聞こえてきた。

「もう勝利投手になれるんだし」

「それだつたら」

「この回だけは」

「いや、ちゃう」

しかしここで西本は言うのだった。彼は今藤井寺の観客席にいた。そこから鈴木 of 投球を見守り続けているのである。

その彼が言ったのである。

「この試合は最後まで投げなあかん試合や」

そうだというのである。

「それでこそスズや。三百勝や」

これが彼の言葉だった。この言葉と共に試合を見守る。鈴木は最終回も投げ続け遂にであった。最後のバッターを見事打ち取ったのである。

彼はその瞬間に両手を大きく広げた。その姿で喜びを表わした。

そして球場の食堂内で祝宴が開かれ多くのマスコミ関係者や球団関係者達がいる中でした。そこに西本もいた。

第四章

鈴木は西本の前に来るとだった。微笑みそのうえで左手を出した。彼が投げるその左手をだ。

西本もまた左手を出した。彼も左利きである。二人の握手はその互いの腕で行われるものなのだ。

その左手同士の握手の後で。鈴木は言うのだった。

「西本さんのおかげです」

こう言ったのである。

「西本さんがいてくれたから今のわしがあります」

「近鉄はずっと弱かった」

そして西本も言うのだった。

「その中でこれだけ勝ってくれた」

「監督……」

「チームが弱ければその中に染まってしまうものだ」

西本もまた言う。

「しかしスズはその中で自分を律してきてやってきてくれた。その結果や」

「いや、ほんまに監督がいてくれなかったらわしは」

「ははは、さつきも言つたやろ」

西本は今の彼の監督という言葉に突っ込みを入れた。

「わしはもう監督やないで」

「あつ、そうでした」

「とにかくや」

そして西本はさらに言ってきた。

「御前はやってくれたんや、三百勝」

「それをですか」

「おめでとう、スズ」

あらためて彼に告げた。

「本当にな」

微笑んで鈴木に告げるのだった。こうして鈴木は三百勝を達成した。

鈴木啓示の名前は球史に残っている。三百勝を達成した大投手としてだ。そしてその彼を三百勝投手にしたのは他ならぬ西本幸雄だった。

「わしは何もとらんで」

しかし西本はこのことに笑ってこう言うだけである。

「スズが達成したことや。わしは何もとらん」

だが。鈴木が速球だけだったかどうかだ。

答えはもう出ていることだ。それは絶対に無理だった。三百勝どころか鈴木は若しかしたら二百勝も無理だったかも知れない。

「やっぱり西本さんが鈴木をああしてくれたんや」

「技巧派にしてくれたな」

「それで蘇らせてくれた」

当時のことを知る者は誰もがこう言う。

「それで三百勝投手になったんや」

「西本さんがいてくれたからこそ」

「あの人やからや」

西本幸雄がいたからこそ、誰もが言った。それは確かに間違いないことだった。このことを何よりも言っているのが鈴木自身だからだ。西本自身が何も言わなくともだ。

三百勝 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5394n/>

三百勝

2010年10月8日14時27分発行